

「がん診療レジデントマニュアル」第2版

国立がんセンター中央病院内科レジデント 編集

愛知県がんセンター病院・院長

大 野 竜 三

現在の日本では、マニュアルと名の付く小冊子が、各社から幾種類も発行されている。しかし、日常診療の場において、その名のごとく手元において、参考にしながら使用する際に、実際に役に立ってくれるマニュアルは、必ずしも多くない。

1997年に発刊された本書の初版は、この種のマニュアルとしては異例とも言えるべき6刷が重ねられている。がん診療のマニュアルがいかにか求められているかを示すとともに、レジデントや研修医に実際役に立ったからこそ、そのような好評を受けたものと理解される。

本書が、がんの実地診療に役立っている最大の理由は、マニュアルを必要とし手元においてこれを参考にしつつ、がん診療を行っている立場にある医師によって、本書が書かれているからであろう。

この度の改訂第2版も初版と同様に、国立がんセンター中央病院で働いている現役のレジデントが分担執筆している。がん診療のいわゆる権威者ではなく実際にがん患者を診療している医師が、自分たちと同じレベルにあるレジデントや研修医を想

定しつつ、彼らが知りたいところや彼らに役立つポイントを、わかりやすい言葉で書いている。

第1章は「がん告知とインフォームド・コンセント」で始まっているが、「本人に伝えることを原則とする」、「家族には先に知らせないのが原則である」と、レジデントや研修医のみならず、がん告知に慣れていない日本のベテラン医師にも読ませたいようながん告知の基本が書かれている。第2章以降は「がん化学療法の基礎概念」に続き、患者数の多い順に「肺がん」、「乳がん」、「胃がん」などの臓器別各論が書かれている。また「原因不明のがん」にも4頁が割かれているが、実地の場でこのような症例に直面して困っている医師が執筆者ならではのマニュアルと思われる。

更に、がん性胸膜炎やがん性疼痛などの合併症、感染症や消化器症状などの化学療法の有害反応対策についても扱っている。そして「抗がん剤の漏出性皮膚障害に対するアプローチ」に7頁を割いている。この章も、実地がん診療の場で静脈注射時に抗がん薬を漏らし、どうしたらよ

いか困り果てているレジデントや研修医にとっては、本当に役に立つところと思われる。

現役のレジデントたちが分担執筆しているため、そのクオリティに若干、危惧のあるところではあるが、がん診療を専門とする国立がんセンターのスタッフである5人の編集責任者が最終稿をレビューして、その危惧を払拭している。しかしながら、例えば同じ白血病のことを、ある章では急性骨髄性白血病とし、別の章では、国際的に権威のある分類法では使用されなくなって久しい急性非リンパ性白血病を使っている。本マニュアルを読む若いレジデントや研修医は、後者の分類名を大学では教わっていない可能性もあり、別の白血病であると間違えて理解するかもしれない。専門医である編集責任者が、はたして、本当にしっかりとレビューしていたのかと疑問を禁じえないのはやや残念である。

● B6変型 頁352 図30 表120
2000 定価(本体3,800円+税) 送料実費

医学書院 刊(☎03-3817-5657)